



|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 短期海外研修のプログラム作りと課題：大阪大学グローニンゲン大学短期訪問プログラム実践報告                                |
| Author(s)    | 渡部, 留美                                                                      |
| Citation     | 多文化社会と留学生交流：大阪大学留学生センター研究論集. 2009, 13, p. 75-82                             |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/50679">https://doi.org/10.18910/50679</a> |
| rights       |                                                                             |
| Note         |                                                                             |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 短期海外研修のプログラム作りと課題

### — 大阪大学グローニンゲン大学短期訪問プログラム実践報告 —

渡部 留美\*

#### 要 旨

本稿では、平成 20 年度「グローニンゲン大学短期訪問プログラム」の実践報告を行う。学内広報、学生募集、オリエンテーション、旅行業者選定について報告したあと、参加学生を対象に実施した研修前後のアンケート及び引率で得た知見から今後の短期研修プログラム作りの課題について述べた。

【キーワード】短期海外研修、オランダ王国、グローニンゲン大学短期訪問プログラム

#### 1 はじめに

大阪大学は平成 20 年 12 月現在、多くの海外の大学と学術交流協定（大学間 70 校、部局間 284 校）を締結しておりこの数は年々増加している。この交流協定を利用し半年から 1 年間海外派遣留学をする学生の数は、大学間・部局間の協定を合わせると、年によって数にばらつきがあるものの、毎年 50 名前後が留学しており、特に大阪外国語大学との統合後はその伸びは顕著である<sup>1</sup>。一方、夏休みなどの期間を利用し 3～4 週間程度海外で研修を受ける短期研修プログラムについては、明確な数値は不明であるが、平成 19 年度を例にとると、夏期に行われた米国、アジア、欧州における 5 つのプログラムだけで、80 名余りの学生が参加した。これらのプログラムの一つに、「グローニンゲン大学短期訪問プログラム」がある。これは、本学が海外拠点を設置しているオランダ王国・グローニンゲン教育研究センター、グローニンゲン大学、本学文系部局教職員が中心となり、プログラム作成、運営に関わっている主に文系学部生向けの留学体験型プログラム<sup>2</sup>である。プログラム自体はグローニンゲン大学のものであり、責任はグローニンゲン大学側にあるが、大阪大学側の要望や意見などを取り入れながら

プログラム作りが行われている。そして大阪大学における学生募集やオリエンテーション、旅行社選定など、プログラム実施までの大阪大学での業務を文系部局教職員（文系短期研修委員会）が毎年持ち回りで担当している。

本プログラムは、参加する学生に「短期間の試験的な留学の機会をあたえる」、「ヨーロッパの文化や社会を現地で学びつつ、英語での授業を実際に経験させる」、「将来における本格的な留学への動機づけをあたえる」ことを目的とし竹中亨国際交流室国際企画推進本部員（文学研究科教授）のイニシアチブのもと立ち上げられた。平成 18 年度に開始され、初年度は、文学部が担当部局となり、文学部、法学部、経済学部の学生 20 名が参加した。平成 19 年度は、人間科学部が加わり、法学部が担当し法学部、文学部、人間科学部から 14 名が参加した。平成 20 年度は、さらに外国語学部が加わり、人間科学部が担当部局となり 5 部局から 20 名が参加した。平成 20 年度の実施期間は、平成 20 年 8 月 26 日～9 月 17 日である。

本稿では、まず平成 20 年度の本プログラムについて、筆者である人間科学部の担当者（以降コーディネーターと呼ぶ）が行った学内広報、学生募集・選考、旅行業者の選定、オリエンテーション、危機管理体制等

\* 大阪大学大学院人間科学研究科特任助教

を中心に実践報告を行う。次に、参加学生を対象に研修前後に実施したアンケート結果とコーディネーターの引率経験から、プログラムの主観的・客観的な評価を行うことを試みた。最後に今後の短期研修プログラムのよりよい運営方法の提案と課題について述べた。

## 2 20 年度実施概要

### 2-1 参加者の募集と選考

#### 2-1-1 広報

過去 2 回の実施担当者の反省や学生からの報告書によると、本研修の存在について学生に十分に伝わっていない可能性があったため、平成 20 年度から本部国際交流室国際企画推進本部の予算にてチラシを作成することとし、入学式において 1 年生に配布を行ったほか、各文系部局および全学共通教育実施部局である大学教育実践センターにもチラシを送付し周知を行った。

#### 2-1-2 説明会の実施

今年度は、これまで行ってこなかった説明会を実施した。4 月中旬と下旬の 2 回、いずれも低学年の学部生が参加しやすいよう、豊中キャンパス共通教育棟にて夕方 4 時半から 5 時半の間に開催した。内容は、コーディネーターによる研修の概要説明、旅行業者による旅程やフライトスケジュール、旅費の説明のあと、昨年の参加者による体験談の発表の時間を設けた。特に研修の内容については、コーディネーターが現地について知識が乏しかったため、現地の様子やプログラム内容について学生に説明できない部分が多く、実際に参加した経験者による説明は説得力のあるものであった。加えて、研修に臨んでの心構え、事前の英語学習、現地での気候や街の様子、必需品、研修の効果など、あらゆる面から報告を行うことで、同じ学生という立場から率直な意見を述べていただくことができた。1 回目の説明会は 25 名超、2 回目の説明会は 18 名の参加があり、こちらの予想以上であった。出席者からは、「英語の勉強は何をしておけばよいか」「受験英語で役に立つか」「国際交流科目を取っているが、1～2

割しか理解できない。大丈夫か」などといった英語に関する質問やオランダでどのような体験ができるのか、といった質問が次々と出、研修に対する関心の高さが伺われた。また、説明会に出席できなかった学生数名からメールなどで英語能力の証明方法や費用について問い合わせがあった。

#### 2-1-3 応募と選考

今年度は入学式の時期にあわせてチラシを配布するなど、時期的にも早くから準備を進めていたこともあり、参加者の募集期間を比較的長くとることができた。平成 20 年 4 月初旬に募集要項を完成させ、申込書、説明会の開催案内と共に各部局の教務係に学内便にて送付した。応募期間は 4 月中旬から 5 月上旬とした。募集要項には、昨年の費用、大学からの助成金の存在のほか、現地では大阪大学グローニンゲン教育研究センター教職員がサポートを行うこと、保護者の承諾書をとること、大学指定の旅行保険に加入すること、などを記し、内容を良く理解した上で応募する旨明記した。申込書は裏表 1 枚の簡単なものであり、選考にあたって参考となるように、英語能力 (TOEFL, TOEIC 等)、渡航経験、英語学習状況、志望動機および抱負を記入させ、本研修を知ったきっかけ、説明会への参加の有無、なども参考としてきた。

参加者の定員が全部で 20 名のため、参加 5 部局の定員を各 4 名とした。定員割れが起こった場合、理工系の学部にも広げた二次募集を行うことを想定していたが、最終的に 37 名 (文学部 8 名、法学部 3 名、経済学部 8 名、人間科学部 8 名、外国語学部 10 名) の応募があった。定員割れがあった法学部を除き、各部局でそれぞれの担当教員による選考が行われた。法学部で浮いた 1 名分は最も応募者の多かった外国語学部の定員を 5 名とすることで調整した。選考の基準は特に設定せず、あくまで部局の担当者に一任したが、結果的にプログラムの趣旨・目的に基づき、海外渡航経験の少ない者、学年の低い者、授業についていけると考えられる程度の英語能力のある者などが選考された。決定後参加をキャンセルした学生がいたため、最終的な参加者は文学部 4 名、法学部 3 名、経済学

部3名、人間科学部5名、外国語学部5名となり、学年別では、1回生7名、2回生5名、3回生3名、4回生4名、大学院生1名であった。性別は女性16名、男性4名であった。

#### 2-1-4 旅行業者の選定

参加する学生にとっても担当者にとってもプログラムの内容と同等に重要であるのが利用する旅行業者の選定であろう。学生や担当者から出される質問に答えるだけの知識・経験、いざというときにしっかりサポートしてもらったり迅速に動いてもらえるだけの体制の有無、低価格であるかどうか、などを考慮することが重要である。毎年決まった旅行業者はなく、過去2年は同じ旅行社を利用していた。今年は4社から見積もりを取り、矢内（2007）で紹介されている旅行業者の選定方法を参考にしながら業者を決定した。その結果、直行便が確保できたこと、低価格であったこと、これまでの実績などを勘案した結果これまでと同じ業者に依頼することになった。

#### 2-2 オリエンテーション

6月初旬の最終的な参加者の決定後、出発までに計3回オリエンテーションを行った。一回目は、6月中旬に行った。教室に到着した参加者に参加者リストを配布し、全員が揃うまでの時間を使い、参加者同士が自己紹介しながら学部と学年を聞き、リストに記入させるという簡単なアイスブレイクを行った。参加者のほとんどが互いに初対面であり、出発までの期間数回しか顔を合わせないため、できるだけ互いを知ることが重要であると考えたためである。次に、グローニンゲン教育研究センター職員とコーディネーターで作成した研修のしおりに基づき日程およびプログラム内容、参加費の支払い、保護者承諾書提出などの説明を行い、続いて旅行業者によるフライトスケジュール、保険の種類と内容、レイルパス購入の説明などが行われた。さらに、海外渡航が初めての参加者もいたため、コーディネーターから海外での行動について気を付けること、出発までにやっておくべきことなどの説明を行った。最後に、宿泊先であるゲストハウスの部屋割りを

決めた。事前に一人部屋、二人部屋、三人部屋（キッチン付き、キッチンなし）があることは伝えていたので、それぞれ希望する部屋の者同士で集まってもらい、自分たちで部屋割りを決めさせることとした。

二回目は7月初旬に行い、リーダー、副リーダーを各二名選出した。出発までに病気や歯の治療をしておくこと、一人暮らしの参加者は、アパートなどを留守にする前にしておくべきこと、現地での治安と安全対策、現地での行動などについて述べた。そのあと、グローニンゲン大学から短期留学中の二名のOUSSEP学生にゲストとして参加してもらい、15分ほどオランダ及びグローニンゲンについてプレゼンテーションをしてもらった。最後に、2グループに分かれ、グローニンゲン大学の学生を囲み自由に質疑応答を行った。参加者は、オランダについての知識を学習しただけでなく、英語で話すことにより、研修に向けてさらにモチベーションを高めることができたようである。

三回目は8月上旬に行った。当日は大阪大学から長短期間留学する学生のための「海外留学派遣学生対象派遣前オリエンテーション」が開催され、大阪大学留学生センター教員による海外留学・研修の心構えについての講演、専門家による留学時の危機管理についての講演に出席した。終了後、本研修の参加者のみによる最終オリエンテーションを行い、旅行業者からの最終説明が行われ、コーディネーターから空港集合時間と場所の確認、帰国後の報告書提出についての説明を行った。危機管理対策として大学本部からの指導による緊急連絡網を配布し、緊急時に連絡すべき箇所の確認を行った。また、コーディネーター、現地グローニンゲン教育研究センタースタッフの携帯番号、宿舎の住所を日本語と英語で記載した名刺大のカードを配布し、トラブルに巻き込まれた時や道に迷った時のために携帯しておくよう指導した。さらに、グローニンゲン教育研究センターから帰国中であった藤原センター長にも参加いただき、現地の気候などの最新情報、持参すれば便利なものなどのアドバイスをしていただいた。

### 3 参加者による本プログラムの評価

#### ー研修前後のアンケートより

次に、参加者に対し研修前後に行ったアンケート結果を紹介する。本プログラムの参加者による期待、実際に参加した学生が本プログラムによって、何を体験し、学び、習得したのかについて述べる。また、コーディネーターは旅程の前半 10 日間ほどを学生に同行した。そのときに得られた知見も取り入れながら考察する。

研修の目的について研修前に問うたところ、表 1 のような結果となった。ほとんどの参加者が英語能力の向上と異文化を体験することを目的にあげていた。さらに自己の成長も 15 名が目的としてあげていた。参加者が本プログラムを、異文化を体験しながら英語能力を高め、海外での経験が自己の成長にも繋がることと捉えていることが伺われる。参加申込書を見る限り、

表 1 研修の目的（複数回答、N=20）

|                              |    |
|------------------------------|----|
| 英語能力の向上                      | 19 |
| 異文化を体験する                     | 17 |
| 自己の成長                        | 15 |
| オランダ(欧州)の文化に触れて知識を深める        | 12 |
| 外国人の友人を作る(知り合いになる)           | 9  |
| オランダ人の友人を作る(知り合いになる)         | 6  |
| 参加者の中で友人を作る                  | 4  |
| オランダ語能力の向上                   | 3  |
| 日本の文化を紹介する／海外の人に日本のことを知ってもらう | 3  |
| 自分の専門分野を深める                  | 2  |

表 2 オランダの何に関心があるか（複数回答、N=20）

|            |    |
|------------|----|
| 食べ物        | 11 |
| 建築物        | 9  |
| 歴史         | 8  |
| 日本とオランダの関係 | 7  |
| 環境問題       | 6  |
| 芸術         | 6  |
| オランダ語      | 5  |
| 政治         | 4  |
| 経済         | 3  |
| 地理         | 3  |
| 教育         | 3  |
| ファッション     | 3  |
| スポーツ       | 2  |
| 宗教         | 2  |
| 法律         | 2  |
| 産業         | 2  |
| 音楽         | 1  |
| 性役割        | 1  |

多くの参加者にとってはこれほどの長い期間親元や日本から離れることは初めての経験であり、期待値が高いと想像される。また、12 名がオランダや欧州の文化に触れて知識を深めることを目的としていたが、オランダの何に関心があるかきいた質問では、歴史や建築物と並んで食べ物をあげており興味深い（表 2）。

研修についてそれぞれ満足度をきいたところ、表 3 のような結果となった。研修の費用について不満が高かったが、全体の費用のうち比較的成本がかかったものは宿泊費であった。宿舎については、時期的に大学の寮を利用することができずこれまで大学の研究者用ゲストハウスを利用している。しかし、結果的に宿舎に対する満足度は高かったので、費用を抑えつつ、満足のいく宿舎を提供できるかがカギとなるだろう。ESN プログラムとは、現地の学生が主催する国際交流団体であり、グローニンゲン大学に留学のため到着したばかりの海外の学生を対象としたオリエンテーションのイベントが 8 月末から 9 月初めにかけて数回行われた。内容としては、市内ツアー、自転車購入の手伝い、カフェバーでの懇談やレストランでの食事会、初歩オランダ語講座、映画会などである。このプログラムについては、オランダや他国の学生と親しくなるよい機会であったと評価する参加者がいた一方、いきなりカフェバーに連れていかれ、お酒を飲みながら暗い場所で話をするに戸惑いを覚えた者や他国の学生にセクハラまがいの被害にあったと訴える者もあり、評価が分かれた。特に、20 近くのグループに分かれて行動したため、一つのグループに本研修参加者が 1～2 人という状況であったことから不安感が一層募ったのかもしれない。このプログラムは自由参加としていたが、どの参加者も外国人と交流したいと意気込んで参加しただけに、初回で楽しめずに、2 回目以降参加を断念した学生にとっては、不満の残る内容であったようである。一般の学生向け専門授業は、滞在中に各学部の専門の授業に参加したり、聴講したりできるというもので本研修の目玉の一つであった。しかし、実際には授業の担当教員に本研修の参加者が受講する旨の連絡が伝わっていなかったり、1 週目の授業が休講になったりしており、満足に授業を受けるこ

とができない状況であった。これは、本研修をコーディネートしているグローニンゲン大学国際交流課と各部署の連絡が不十分であったためであるが、実は毎年起こっている問題であり、今年度も改善がみられなかった。さらに、本研修の参加者が受講可能な授業の発表がオランダ到着後であったことから、参加者が事前に研修の予定を立てることができず、ストレスとなっていた。このような諸事情から、来年度以降もこういった問題が生じる可能性もあり、プログラムの内容に盛り込むことについては検討課題とすることになった。

表3 研修の満足度 (N=12)

|               | 非常に満足 | 満足 | やや不満 | 不満 |
|---------------|-------|----|------|----|
| 研修の費用         | 0     | 3  | 8    | 1  |
| 研修期間の長さ       | 2     | 8  | 1    | 1  |
| 説明会(参加者のみ回答)  | 2     | 7  | 1    | 0  |
| 阪大でのオリエンテーション | 2     | 8  | 2    | 0  |
| 宿舎            | 6     | 5  | 1    | 0  |
| ESNプログラム      | 2     | 4  | 5    | 1  |
| 英語プレゼンテーション授業 | 5     | 6  | 1    | 0  |
| 一般の学生向け専門授業   | 0     | 2  | 5    | 5  |
| 週末バスツアー       | 9     | 3  | 0    | 0  |
| 初日のアムステルダム見学  | 7     | 4  | 1    | 0  |

本研修の参加者のほとんどが目的として掲げていた英語能力の向上については効果はあったのであろうか。様々な場面で英語を使用することについての不安を聞いたところ、研修前と研修後で変化がみられ、研修後は、全体的に英語使用の不安が軽減された(表4)。多くの参加者は、公共の場で英語を使用することについては実践を積むことによって度胸や自信をつけたようである。表3で満足度の高かった英語プレゼンテーションの授業も効果があったようで、英語でプレゼンテーションをすることの不安についても軽減されていた。一般的に海外研修で得られる最大の成果の一つとして英語の聞き取り能力の向上が挙げられる(野中他、2001)が、聞きとりについて問題がなくなったと回答した参加者が増えていた。コーディネーターは全部

で5回あった英語プレゼンテーション授業の1回目を見学したが、本研修参加者20名だけのための授業であったものの緊張もあってか、積極的な発言や質問ができることは少なかった。おそらく参加者同士も互いのことや英語能力を知らないで、遠慮や気後れがあったのかもしれない。また、単語の意味を知らないために教師の質問が理解できないこともあったようである。例えば、“Do you have a laptop?”(ノートパソコンを持っていますか)と聞かれても“laptop”が何であるかを知らない参加者が何人かおり、こういった学習に必要な単語を事前に知っておく準備の必要性を感じた。

表4 英語の使用に関しての不安

|   | 研修前(N=20) |      |      | 研修後(N=12) |      |      |
|---|-----------|------|------|-----------|------|------|
|   | 非常に不安     | 少し不安 | 問題ない | 非常に不安     | 少し不安 | 問題ない |
| ① | 8         | 10   | 2    | 3         | 5    | 4    |
| ② | 9         | 11   | 0    | 2         | 8    | 2    |
| ③ | 10        | 10   | 0    | 7         | 3    | 2    |
| ④ | 10        | 10   | 0    | 1         | 6    | 5    |
| ⑤ | 9         | 10   | 1    | 3         | 5    | 4    |
| ⑥ | 5         | 12   | 3    | 1         | 5    | 6    |
| ⑦ | 7         | 10   | 3    | 0         | 5    | 7    |
| ⑧ | 5         | 11   | 4    | 0         | 0    | 12   |
| ⑨ | 8         | 10   | 2    | 0         | 8    | 4    |
| ⑩ | 5         | 14   | 1    | 0         | 3    | 9    |
| ⑪ | 7         | 11   | 2    | 3         | 3    | 6    |
| ⑫ | 8         | 11   | 1    | 4         | 4    | 4    |
| ⑬ | 8         | 11   | 1    | 4         | 7    | 1    |
| ⑭ | 3         | 12   | 3    | 0         | 5    | 7    |

\*各番号は下記の質問をさす。

- ① 授業中、英語を聞きとること
- ② 授業で自分の意見を述べること
- ③ 授業でディスカッションすること
- ④ 授業でプレゼンテーションをすること
- ⑤ 授業で質問をすること
- ⑥ 英語の宿題をすること
- ⑦ オランダのレストランなどで注文をすること
- ⑧ オランダのスーパーなどで買い物をする
- ⑨ オランダで乗物にのるときなどチケットを買うこと
- ⑩ 公共の場でオランダ人に話しかけ、英語で道などを聞くこと
- ⑪ 授業やイベントで会ったオランダ人や留学生に気軽に話しかけること
- ⑫ オランダ人や留学生に自分の専門分野について説明をすること
- ⑬ オランダ人や留学生に日本の文化や社会について説明をすること
- ⑭ オランダ人や留学生に自分の趣味について話をする

\*研修後の質問では、「オランダ」「オランダ人」の部分、それぞれ「海外」「外国人」と質問した。

桂(2002)は海外語学研修の意義のひとつとして、自分の気持ちを伝えたい・交流したい強い思いが文法にこだわらずに言いたいことが言えるようになり、完璧な文法を使うことの緊張感が薄れ、更に、コミュニケーションとしての語学を勉強したいという学習意欲が高まると述べている。そして結果的にこの意識が語学能力を高める上で重要な動機付けとなっていると指摘している。そういった意味でも、海外での研修は帰国後の英語能力を向上させるよいきっかけとなっている

表5 オランダのイメージ (研修前)

|    |                                                                                                               |
|----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1  | 欧州の小国、特別これといった特徴のない国                                                                                          |
| 2  | のどかな国                                                                                                         |
| 3  | 空と草原ばかりで、あまり観光を楽しめるところはなさそう。食べ物が高価。オランダ人は陽気                                                                   |
| 4  | オランダについての知識はほとんどありませんでした。その分、先入観なく行くことができたと思います。ただ、オランダの独自の法律が施行されていることや、小さい国なのに世界でのインパクトが大きい点では、大変興味がありました。  |
| 5  | 麻薬等が蔓延していて危険                                                                                                  |
| 6  | ヨーロッパなのでやはり環境問題に積極的に取り組んでいて、またオランダに限らず外国人は不親切だというイメージがあった。                                                    |
| 7  | オランダ人は世界一背が高くでおおらかで、のんびりした田園風景のイメージが強かった。福祉や環境問題に積極的なヨーロッパの一国なので、きれいな国だと思っていた。売春や麻薬が合法なので、自由で自己責任の強い国だと思っていた。 |
| 8  | 風車、チューリップ、ミッフィー、人種問題、チーズ                                                                                      |
| 9  | オランダはあまり治安が良くなく、人も冷たそうなイメージがあった。                                                                              |
| 10 | 結構小さな国。風車、チーズなどのイメージしかなかった。                                                                                   |
| 11 | ヨーロッパなので、学ぶことなど厳しい姿勢だろう。自然が美しく、それを人々が誇りにしているだろう、と思っていた。                                                       |
| 12 | 日本と異なる点が多いのではないかと考えており、共通点は少ないのではないかと考えていた。                                                                   |

表6 オランダのイメージ (研修後)

|    |                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1  | 自由・自己決定(売春、ソフトドラッグ、安楽死)、他方、福祉国家(高税率、高保障)、美しい都市景観・低地、草原、水路                                                                                                                                                                                                                                                  |
| 2  | 自国語はオランダ語だが、国民全体の英語力が高い国だと感じた。                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| 3  | 想像していたより見所が多かった。特に、パスを使ってほとんどの美術館に無料で入館できるという点が、文化面で日本より優れていた。雄大な空や平原もあれば、近代的な建築が点在していたりと、驚嘆させられることが多くて飽きなかった。食べ物はやはりパンやポテトなど穀物類中心だったが、日本のものより美味しく感じた。スーパーにはいろいろな食材がそろっているし、市場も充実していた。街中でアイスやワッフルを気軽に食べ歩きできるのが楽しい。オランダ人は陽気というか、しっかりと芯があって何事にも積極的。楽しむときは楽しむ。皆親切であたたかい。そして、自国を愛する気持ちが、歴史の授業やダッチパーティーで伝わってきた。 |
| 4  | 実際にオランダに行ってみて、オランダ独自の法律やオランダの持つ経済力や世界でのポジションの根拠などまでは分かっていなかったものの、もっと生活に密着したことに対する理解は深まりました。主に食生活や自転車に乗る文化を始め、オランダ人の持つ雰囲気など、実際に行くと肌で感じないと分からないことを学んでくれたと思います。                                                                                                                                               |
| 5  | 自由な風土がある                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| 6  | ゴミの分別もなく、広場などは日本と比べものにならないほどゴミが散乱していて汚いなど、環境問題に対する取り組みは全く見受けられなかった。またオランダの人は日本のように懇切丁寧に面倒をみてくれるわけではないが、日本人よりも気さくで、困っていると気軽に声をかけてくれる。                                                                                                                                                                       |
| 7  | オランダの風景や建造物はとても美しく、風車や教会、石畳など日本と全く異なるものに魅かれたが、ゴミのポイ捨てや喫煙も多く残念なこともあった。オランダ人の英語能力の高さに驚くと共に言葉が通じる便利さを実感した。飾り窓等の日本では考えられないものが文化として存在することに大きな衝撃を受けた。                                                                                                                                                            |
| 8  | 文化、街、人、全てが日本とは違う国でした。グローニンゲンが学生の町だということを実感しました。住みやすかったです。                                                                                                                                                                                                                                                  |
| 9  | グローニンゲンは、治安も悪くなくゆったりとした雰囲気だった。また、ヨーロッパ系の人だけでなく、世界各国から来ている人がいたため驚いた。                                                                                                                                                                                                                                        |
| 10 | 小さいようで大きな国。ヨーロッパ、EUの加盟国ということで周囲の国々も近い結びつきが強いように感じられた。風車はあまりなかった。                                                                                                                                                                                                                                           |
| 11 | 皆で団結して自国を盛りたてて行こうとする姿勢が強く、家族の繋がりも強い国だと思った。他国の人に対しても優しく、全てに積極的だった。Man-madeを誇っているのが素晴らしい。                                                                                                                                                                                                                    |
| 12 | もちろん異なる点は多かったが、オランダであれほど自転車文化が発達していたことには驚いた。また授業が無くなった時に生徒が喜ぶ様子は日本と同じだと思ったが、いざ授業が始まった時の集中力、積極性、また教授の意欲は強く感じられ、日本との最大の違いではないかと感じた。                                                                                                                                                                          |

\*表5と表6の番号は同一人物であることを示している。

と考えられる。実際、ある学生は、研修前に730点であったTOEICが研修後には810点になり、研修の効果を実感している。研修の効果を知るためにもこういった英語能力を測定することも今後は必要であろう。

参加者に研修前と研修後のオランダのイメージを聞いたところそれぞれ表5、表6のような結果となった。マスコミなどを通してしか持っていなかった漠然としたイメージが実際に現地に足を踏み入れ、現地の人と接し、体験することで明確なイメージが確立されていることがわかる。マイナスイメージを持っていたものがプラスのイメージになったり、その逆もあった。いずれにせよプラス面もマイナス面も含めて自分の目で確かめることによってオランダという国の現実を捉えることができたようである。

#### 4 本研修の発展に向けた今後の課題

##### ー学生にとって有益なプログラム内容の提供ー

冒頭で触れたように本プログラムの主体はグローニンゲン大学であり、大阪大学側はプログラム運営上の決定権を持っているわけではない。ただ、グローニンゲン大学自体もこういったサマープログラムをパッケージとして持っているわけではないため、毎年一からプログラム作りを行っている。いわゆる手作りのプログラムなのである。そのため宿舎の手配、研修内容の決定などプログラム完成までのプロセスに膨大な手間と時間がかかっている。これは、同じく文系短期研修委員会が担当しているマヒドン大学での研修(マヒドン大学インターナショナルカレッジが運営するパッケージ形式の研修)とは性格が異なる。しかし、コーディネーターがグローニンゲン大学の担当者と懇談した際には、本プログラムをよりよくするために今後も努力したいと述べていただき、グローニンゲン大学が大阪大学を重要なパートナー校として考えていることが伝わってきた。本稿では、このような運営自体の問題については触れず、将来的な本プログラムの単位化も見据え、学生にとって有益なプログラムとなるよう大阪大学側が検討すべき課題のうち、事前学習と研修後の

フォローアップについて述べる。

まず事前学習についてであるが、英語学習、オランダについての事前学習、海外研修一般などについての講習が考えられる。英語学習については、今年度は自分で勉強しておくようにとだけ伝えてあったが、具体的に何を勉強し準備しておけばよいのか分からない学生もいると思われる。例えば、英語での授業を受けるために必要な単語や言い回し、現地の人とコミュニケーションをとる際の手法や表現など最低限のことを知っておくだけでもよりレベルの高い授業になるだけでなく、現地での生活に早く溶け込めることが期待できることから、こういった英語学習の機会を提供することも考えられる。

オランダについてのイメージの変化は先に述べたとおりであるが、オランダや研修地であるグローニンゲンについてある程度知識を得ておく必要はある。初日に行われた2時間ほどの市内ツアーでは、大学教員によりグローニンゲン大学の歴史や建築物の説明のあと、市内を散策しながら街の歴史、モダンアート、運河のつくりや合法化されている売春についてなど興味深い話がなされた。しかし、歴史上の人物や年代の話についてはかなり込み入っており、事前に情報を知っておけば理解もしやすく、質問も出やすかったのではないと思われる。さらに、オランダについて乏しい知識のまま現地にいったとしても、現地の学生や地域住民と交流した際により深い話はできないであろう。仮に、海外の学生が大阪大学に短期研修で訪問したとして、日本のことや大阪のことを全く知らない、あるいは偏った知識しか持っていなかったとしたら、ホスト側としては残念な感想を抱くであろうことは想像に難くない。そう考えると、事前に現地のことをよく知っておくことは現地人との交流という観点からも不可欠であると考えられる。今年度オリエンテーションで行ったグローニンゲン大学からの交換学生による講義と交流会のほか、現地の歴史、文化についての事前講習は有効であろう。

今回の引率では、海外研修に参加する際の心得や現地での振る舞いについて、いくつか事前に情報として提供しておけばよいと感じた。何人かの参加者は現地

の学生が授業中に居眠りを全くせずに積極的に授業に参加している姿に感心していたが、日本以外の国では当然のことであり、逆に日本人が電車やバスの中で居眠りをしていることは現地の人からすると奇異に映ったようである<sup>3</sup>。本研修で図書館の利用方法について説明を受けている際に数人の参加者が居眠りをしていたが、失礼な行動であると受け止められかねないことから、こういった行動には注意するよう事前に徹底すべきである。また、日本人は会話などの際、不快に思っても相手を傷つけることを避けるため婉曲的な表現を用いる、口に出さなくても以心伝心で意図をくみ取ってもらえる、相手の言っている英語が分からなくても相槌の意味で頷いてしまう、など欧米人の一般的なコミュニケーションとは異なるスタイルをもっている(末田・福田、2003)。相手の言動が嫌だと感じた場合はっきりと“No”と言わないと相手に通じない、そう言っても失礼にはならないことを知っていればESNプログラムで体験した不快な思いは避けられたかもしれない。本研修では女子学生の割合が高いことから(男子学生だから安心というわけではないが)、身の安全については、防犯対策と同様に危機管理として徹底すべきである。

次に研修後のフォローアップについて述べる。研修を終え報告書の提出をもって本研修は終了となったが、帰国後も英語の勉強を継続したい、留学生と交流したいと切願する学生が何人も出ており大変喜ばしいことである。そこで参加者決定後から立ち上げていたメーリングリストを活用し、コーディネーターの知る限りの国際交流関係の情報を流すことにした。これまで、10月に来日したグローニンゲン大学からの交換留学生のチューター、11月の国際学会のアルバイト、平成21年2月の大阪大学超短期プログラムのチューター<sup>4</sup>について募集の情報を流したところ、多くの学生から応募があり選考に困るほどであった。また人間科学研究科国際交流室主催の留学生パーティの案内もしたところ、人間科学部以外からも参加が多数あった。パーティで本研修に参加した学生が積極的に留学生に話しかけている姿をみると、研修の成果を実感すると共に、このモチベーションを継続させるために大

学としてフォローアップの努力をしなければならないと感じた。日本以外の文化を体験・吸収し、外国人と接することによって国際交流の楽しさを学んだ学生が、研修後大阪大学の国際化に何らかの形で貢献することにより真の意味で研修の効果があったと言えるのではないだろうか。貴重な人材を学内で生かす創意工夫が必要である。

## 5 おわりに

平成 21 年 1 月、大阪大学執行部により「大阪大学グラウンドプラン」<sup>5</sup> が策定された。そのなかで、大阪大学の「学生の外国語能力を飛躍的に高め、在学中に海外留学経験をもてるよう大胆な教育改革に取り組む」と述べられている。短期海外研修は、経済的、時間的に長期留学できない学生にとって魅力あるプログラムであり、語学能力の向上、見識の拡大、国際感覚の涵養などの効果が期待できる。大学の学生サービスの一環としても今後、より多くの学生が海外に出かける機会を提供すべきであると考えます。

## 注

1. 「阪大生のための海外留学ガイドブック」平成 20 年 6 月研究推進国際部学生交流推進課発行

2. グローニンゲン大学では本プログラムを *appetizer programme* と呼んでいる。英語授業、専門科目の履修、バスツアー、学生との交流など、長期の留学をした場合に体験できる内容を盛り込んだプログラム構成となっている。
3. グローニンゲン教育研究センター職員鐘ヶ江氏のレポートによる。
4. <http://ex.isc.osaka-u.ac.jp/spring2009/index.html>
5. <http://www.osaka-u.ac.jp/jp/annai/about/groundplan.pdf>

## 参考文献

- 桂真佐子（2002）「海外研修プログラムに関する調査研究－武蔵野女子大学短期語学研修における参加者の自己評価に関する調査報告－」、『武蔵野女子大学文学部紀要』、第 3 号、pp.79-105
- 野中辰也・田中ゆき子・隅田朗彦（2001）「短期語学留学プログラムの効果測定（1）」『新潟青陵女子短期大学研究報告』第 31 号、pp.71-78
- 末田清子・福田浩子（2003）『コミュニケーション学 その展望と視点』、松柏社
- 矢内結香（2007）『短期海外研修担当者のためのハンドブック』